
お仕置きプレー

Bloody orange

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お仕置きプレー

【Nコード】

N3251V

【作者名】

B l o o d y o r a n g e

【あらすじ】

快斗が旅行に新一を誘うが？新一は無関心。

旅行当日に実は、女の子達も一緒だったと言う事を知った新一の怒り爆発！

お仕置きプレーオフ！

快斗と新一

工藤家のリビングでは、新一が新刊の推理小説を読んでいた。

快斗は、忙しく掃除や、料理を作っていた。

『新一！来週の3連休って、予定空いてる？って先週から聞いたんだけど、まだ答え貰ってないよ。』

『うーん。解ってるよ。考えとく。』

唯一の自分の時間を独占している小説に、恨めしく思った快斗は、口角を上げると、『分かった。無理なんだね。じゃあ、俺は、白馬達と一緒に旅行に行って来るよ。』

一言残した。

新一は、『ばーか。俺が行けるわけないだろ。何時事件があるかもしれないのに。』小説に向って文句を言っていた。

新一は、人一倍プライドが高く、独占欲も人一倍強く、何て言ってもサディストだ。

絶対に、自分が不安になっている所を誰にも見せない。

快斗が作った料理を食べている時も、いつもと同じ様に普通にしていた。

『なあ、快斗。その旅行って、どこに行くんだ？』

『ん？気になるの新一。』

『もし、そこにキッドが現れたら、行かなきゃ何ねーからな。』

『箱根にある白馬の別荘だよ。温泉もあるって言っていたからさ。楽しみなんだ。』

『そ、そうか。良かったな。』

心の中では、快斗をベッドに縛り付けてでも、旅行になど行かせたくないと思ったが、理性がそれを押さえた。

旅行当日。

快斗が『新一！集合場所まで車で送ってくれよ。新一と3日も離れ

るのは、寂しいからさ。』

猫の様に甘えて来る快斗に、新一は 嫌々な顔をしながら『ああ、分かったからそれ以上、抱きつくな。』と一言嗜めた。

集合場所である白馬の屋敷に居たのは、白馬や池田だけじゃなかった。

お、女？しかも、3人？

それも、他校の可愛い子ばかりだった。

白馬は、俺の顔が引き攣っているのを見て、『ゴメンね。新一君。今回の旅行は、男女合わせて6人って……黒羽君から、聞いてなかったの？』

俺は、助手席で『旅行♪旅行♪旅行♪』と能天気之歌ってはしゃいでいる快斗を睨んで『いや。白馬達と一緒に旅行に行くとした、聞いてない。』

腑が煮えくりそうだったが、この俺が快斗の事をご執心だと言う事を白馬に悟らせない為、平常心で『そうだったんだ。快斗楽しんで来い。旅行が終わったら、色々聞きたいしな。』

俺の声が、一オクターブ低くなっていた。

快斗は、俺の声にビクンとしていたが、『新ちゃん。怒ってないよね。女の子が居るって事、言ってなかったから……』

青い顔で、俺の事を見ているが、俺は、冷静に笑顔を見せた。

『いいや。全然 怒ってなどないさ。』

俺の言葉に、顔を青ざめた快斗は、白馬に助けを求めた。

『工藤君もどうですか？飛び入りで参加できますけど。』

その言い方に自尊心を傷つけられた。

『いや、いいよ。悪かったな白馬。変な気を使わせちゃって。実は、目暮警部から、呼ばれているから、行けない。』そう言う俺は、車から降りようとする快斗に、天使のような笑顔を見せた。

その後、目暮警部から本当に連絡が来て、事件の事を相談されていた。

現場に行くと、容疑者6人から犯人を割り出す為の証拠探しをして

みれば、案外早く犯人が割り出された。

それを警部に報告すると今夜は、家に急いで帰った。

工藤家の家の中は、快斗が居ないだけで、こんなに空っぽに感じるのか・・・。

快斗からは、『愛してる』『好きだ』と言われていても、俺からはいつも言わない。

言わなくても、男同士で抱き合い 行く所まで行ってるのだから、何を今更 好きだの愛しているだの言わなきゃ何ねーんだ。

携帯が鳴り、確認すると蘭からのメールだった。

『きちんと相手に、自分の気持ちを伝えたの？言葉で伝えないと、いつまで経っても相手には、新一の気持ちなんて伝わらないよ。』返事に『わーってるよ。今同じ事考えてたが、相手は旅行に行っちゃった。』

そうメールで返しておいた。

『快斗君、結構モテるのよ。男にも女にも。新一も素直になつて。』返事が来た時に、分かっているさ。

だが、アイツも正直に男女ペアで6人とは言わなかった。

三日後、白馬からのメールで、『黒羽君をそちらに送り届けますから大丈夫です。』と来た。

咄嗟に『断る。白馬の家で暫く預かれ。』返信をした。

白馬は、新一からのメールを快斗に見せると呆れた様に、微笑んでいた。

『黒羽君、やはり言ってなかったんですね。男女3組の旅行だと。工藤君、相当怒っていますよ。』

それから、何度も快斗からメールや電話がかかって来たが、全く通じなかった。

とうとう、快斗は白馬に『白馬の携帯を貸してくれ。俺の携帯は、着信拒否されてるんだ。』

白馬は呆れた顔で、『工藤君が怒るのも、当たり前です。そう言うのを自業自得と言うんですよ。』慰めにもならない事を言って来た。

白馬の手から、携帯をもぎ取ると早速新一の携帯に電話をかけた。
『白馬？どうした。』

『し、新一く。ゴメンよく許して下さい。もう、こういう事なんてしないから。』

『・・・帰って来い。』

『え？』

『何度も言わせるな。帰って来い。』

『うん！』

白馬に携帯を渡すと『僕の車で送りますよ？え？、あ、はい。そうですね。わかりました。』微笑みながら電話を切った。

『黒羽君。工藤君はずっと屋敷の前で待っているんですよ。』

快斗の顔がパァツと明るくなった。

自分の荷物を纏めて、すぐに新一の車に向って一直線に走って行った。

新一は、車から降りると両手を広げて快斗を迎えてくれた。

『心配させやがって。』

『ごめんよ。新一！』

『今夜は、じっくり旅行の事も、白馬の家に居た時の事も、聞かせてもらうからな。覚悟しておけ。』

『やっぱり、まだ怒ってんじゃない！』

『当たり前だろう！好きなヤツが他の女と一緒に居るのは、嫌なんだよ。／＼／＼／＼』

『え？もう一回言って。』

『それだけ、お前が好きだと言う事だ。それに、今回のお仕置きも未だだしな。』

『へ？お仕置き？』

この日の夜は、まるで拷問のような取り調べが、工藤邸で行われていました。

『さあ、全部言わないと。この刺身を食べてもらうからな。』

食卓の上に、快斗を縛り付けた新一は、快斗が逃げない様に、周りに魚を置いていた。

『全て白状すれば、許してやる。』

[illegible]

工藤邸に響く、快斗の声は『やっぱり新一は、サドだ!』でした。

快斗と新一 (後書き)

内容はモロに実話デス。

快斗と新一？

さて、あの旅行から2人は一ヶ月もの間、絶縁状態でした。

それを復縁させたのは、幼なじみの毛利蘭と探偵で同じ大学の白馬だった。

白馬から、『実は、あの日夕食をした後、黒羽君がマジックをやって、結構盛り上がったんですよ。それで・・・これって、黒羽君から聞いてますよね？』

恐る恐る俺に聞くと言う事は、快斗は俺には言えない事だ。

新一は、『知っているよ。快斗に拷問してやったら、自白したからな。』

白馬はホッとして『なら、良かった。もし食事の後、本当はみんな男女に分かれて二部屋に寝るはずだったのに、みんな酔いつぶれちゃって、一つの部屋に雑魚寝状態で・・・黒羽くんは、女の子の隣で猫の様に丸まって寝ていて・・・。』

新一は『ほう・・・。それは、面白い。確かに雑魚寝をしたと聞いていたよ。その後はどうだったんだ？白馬。』

俺の迫力に押されたのか、そこで黙ってしまった白馬。

白馬に『池田に聞いても良いんだが、お前が一番良く知っているようだから、包み隠さず綺麗に吐けば、楽になるぞ。』迫って、脅したら言ってきた。

女の子達に抱きつかれていたと言っていた。

携帯で快斗を呼び出すと、『白馬からこんな風に聞いたんだかな。』

それに、証拠写真もあるし。どう言う事だ？答えように寄っては、もう俺の家への出入りは禁ずる事になるがな。』

快斗は、白馬の顔を見ると『お前が余計な事を新一に話すから・・・。』

新一が快斗を見ると『ほう。自分は知っていて、俺には話さなかったんだ。それって、この間のお仕置きが足りなかったと言う事だよ。』

な。』

サディストの新一の蒼い瞳がキラキラと光る。

白馬の方を見ると顔を青ざめていた。

『白馬。お前はもう帰って良い。これからは、俺と快斗の楽しいお仕置きの時間だからな、なあ快斗?』

そう言うとき白馬は、快斗を見ると『ご無事で。』と一言残して去って行った。

蘭に電話をして『例の物を用意してくれてたか?』

『ああ。サンキュー。今から家に行くから、蘭達はもう帰った方が
良いぞ。』

快斗を捕まえて車に乗せると家へ向った。

食卓に並べられているのは、全て魚料理。

『快斗。楽しいお仕置きの時間だな。全部食べ! そうしたら、許してやらん事もない。』

哀れ快斗は、気絶を繰り返しながらも、青くなったりして、魚料理を残らず平らげた。

大きな瞳に涙を浮かべる姿が、愛おしくて、新一は、『もう、いいよ。快斗……許す。』そう抱き締めると優しくキスをした。

その夜、快斗は魚に追っかけられる夢を見て、新一に抱きついて
いた。

新一は、快斗を起こすと、朝まで別のお仕置きプレーをしていました。

快斗と新一？（後書き）

これもほぼ実話です。

新一の涙

この所、俺と快斗の邪魔をする奴も減って来た。

新一は、毎日不安だった。

いつかは、快斗も蘭の気持ちと同じ様に、俺から離れて行くんじゃないのかと、肌を合わせる度に、その不安が増して行く。

いつも、新一は冷静沈着で、人一倍プライドが高く、独占欲も強いサディストで、自分の弱い所さえも恋人に見せる事が無い。

新一は、快斗を呼び出した。

『快斗。お前何か、俺に隠してるだろう？』

快斗は俺の目をもう見ていない。

傷つくのは、ゴメンだ。

それなら 俺から別れ話を切り出してやろう。

『快斗。お前が、そのつもりなら、何時だって俺はお前と別れてやってもいいんだ。』

『し、新一……。ち、違うんだ。』

慌てて俺の顔を見ている快斗に、『もう、いいんだ。じゃあな。』
そう言って、俺は快斗の前から立ち去った。

蘭からの呼び出しで『新一？ 快斗君と別れたって、本当なの？』
行きつけの店で、怒鳴る事は無いだろう。

『ああ。別れた。』

水割りを飲みながら、蘭にそう言った。

『どうして別れなんか切り出したのよ。快斗君、泣きながら私に電話して来たのよ。』

新一はため息をつきながら『あいつが俺に隠れてコソコソしているから、別れ話を切り出したただけだ。そもその原因は快斗にある!』
『嘘つき!』

蘭の目から涙が毀れていた。

『新一は、自分が傷つきたく無いから、怖いから快斗君をつったのよ。彼の気持ちも確かめず。新一は、意気地なしよ!?!』

『な、何だと? もう一遍、言ってみろよ』

『何度も言ってやるわよ。新一の意気地なし? 自分で快斗君に聞いて見なさいよ』

『そこ迄、言うんなら聞いてやろうじゃ無いか。蘭、快斗を呼び出してくれ。俺の携帯:折れたから』

(一体、どうやって此処まで、携帯をひねり潰したのかしら...
冷静沈着な新一がここまで取り乱すなんて、珍しい...) 蘭は、クスリと微笑む。

(これじゃあ、あのメールも見れないのね。)

『はいはい。 もしもし、快斗君? 新一が話をしたいって。ウン分かったわ。』

蘭は、携帯を閉じると『新一の心が分からない。 って言っていたわよ。』

『いいんだよ。 もう元に戻るチャンスは無いんだからな。』

我慢していたのに... 涙が出て来た...

すると蘭は、微笑んで『快斗君、新一の家で会いたいんだってよ。

早くいってらっしゃいよ!』

『サンキュー蘭。』

蘭に背中を押されて、伝票を持って支払いを済ませた。

降りしきる雨の中を走って、快斗が待っている俺の家に帰った。
玄関のポーチで、雨宿りしていた快斗を見つけて、抱き締めた。

『し 新一? 走って駆け付けてくれたの?』

俺の顔を見て、驚いた快斗は『し、新一．．．どうしたの？何で泣いているの？』

ずぶ濡れになった俺を抱き締めた。

『嬉しいよ。何時だって冷静沈着で、ポーカーフェイスの新一が慌てて此処に来てくれるのだけでも、嬉しいよ。』

『快斗。俺は、怖いんだよ。いつか．．．お前が、俺から離れて行くのが、怖かったんだ．．．。許してくれ．．．。快斗．．．。』

鍵を持ったまま、俺は意識を手放した。

目を覚ますと、自分の部屋だった。

俺の右手を快斗がずっと握り締めていたようだ。

快斗の猫っ気のような髪を手で無造作に撫でながら、『快斗．．．俺でいいのか？俺なんかの隣にいて良いのか？』

俺は結局、憶病者だ：

目を覚ました快斗に『寒い！快斗、来いよ。俺を温めてくれ』

俺は、初めて快斗に懇願していた。

いつもなら俺がリードしているが、今日だけはお前に任せるようそう呟いた。

『快斗のもう一つの顔が見たいからな。お前は、いつも受け身ばかりだからな。俺を抱いてみろ。』

快斗は、『新一は、やっぱり、サディスト!!』

そう言う快斗を抱き締めた。

待ち合わせ

待ち合わせは、5時ジャスト。

大時計の鐘が鳴り響く。

辺りを見渡すと、恋人達がどんどん集まって、それぞれに散って行く。

俺の待ち人は、何時来るんだろう？

30分待っても、まだ来ない。

一体、どうしたんだろうか？

後30分待ってみよう。

後少し待ってみよう。

そうしていたら、もう時刻は9時。

頭に来て、相手に電話を入れると『あ！ゴメン。忘れていた。．．．』

その一言で片付けられた。

覚えてろ．．．。

折角のクリスマスイブが台無し。

新一は、もしかして蘭もこんな思いで、俺を待っていてくれたのだろうか？

懐かしい幼なじみの顔を思い浮かべた。

家に帰ると快斗は居なかった。

どうやら、自宅に帰っていたらしい。

快斗の自宅に電話を入れると、快斗の母親が出てくれた。

なんでも、快斗はずっと一日眠りこけていたとの事。

病気だったら、許していたが、俺とのデートの約束を忘れて、眠っていただと！

許さん！

快斗の母親には、『快斗に暫く会いたくないと伝えて下さい。電話も二度と するなとお願いします。』と伝言を残してもらった。

数分後、携帯が鳴った。

出ようとしたが、止めた。

ついでに、家の電話のコードも抜いておいた。

静まり返った家に、吸い込まれそうなそんな気分だった。

久々の一人の時間を大好きな小説を呼んで過ごしていた。

朝から、携帯が鳴った。

服部からの電話だった。

どうやら、快斗が服部に泣きついて来たようだ。

服部は『工藤。黒羽の事を許してやれ。本人も反省しているんだし。』そう言っていたが、『断る。俺はあの寒空の中を4時間も待たされたんだぞ！この俺を待たせるなんて、良い度胸してるじゃねえか。そう思わないか服部。』

服部は、俺が完全に怒っている事を分かっているから『分かった。じゃあ、黒羽にもそう伝えれば良いんやな。』そう言うと言電話を切った。

昼頃、また電話がかかって来た。

今度は、白馬からだった。

俺は、『今、蘭と園子と一緒に映画に行く途中だ。切るぞ！』

そう言い出すと、白馬は慌てて『黒羽君、麻疹に患っているんですよ。寝言で、工藤君の事を呼んでいると聞いて、電話をしたんです。』

『俺は、お断りだ。勝手に病気でも何でもなりやがれ。俺を4時間も待たせた罰だ。切るからな。』

そう言うと言電話を切った。

俺が怒っているのを見て、蘭は笑っていた。

『新一が、そんなに感情剥き出しになっているのって、初めてだよね。何だか悔しいな。待つ事が嫌いな新一が、4時間も待つなんて・・・奇跡だよ。でもさ、行ってくれば？黒羽君の所。麻疹って、

大変なんだもん。新一は小さい頃に私と一緒に患っていたから大丈夫でしょ。』

園子からも、『新一君は、散々蘭を待たせたんだもん。なのに、蘭じゃなくて黒羽君を選んだんでしょ。その蘭の言う事位、きいてやっても良いんじゃないの?』

園子の言う事にも一理あり。

俺は、顔を赤らめながら『仕方ねえな。じゃあ、行って来る。今回の映画悪かったよすまない2人とも。』そう言い残して、足早に駆けて行った。

快斗の家に行くと、白馬と服部がいた。

『黒羽。大体、工藤との約束を忘れて、コタツで寝とったお前が一番悪い。まあ工藤が怒るのも、無理ないわな。』

『そうですよ。黒羽君。麻疹に患ったのも、天罰だと思って家でゆっくりするんですね。仕事も休業して。』

2人から、責められてばかりの快斗は、正座をして『俺が悪いんです。』と言っていた。

新一が、『来てやったぞ。快斗。』と言うと快斗は、新一に抱きついて『会いたかったよ!』と言って来た。

『お粥を作ってやったから。』
そう言う。

『あ、俺そんなお粥は好きじゃない。』

その一言で『お前……一体誰に言っただ? え? 一遍死んで来い!』

黄金の右足で蹴られる快斗。

涙眼でも、嬉しい顔をしている快斗君は、マゾですかね。

待ち合わせ（後書き）

これも実話です。

蹴りを入れたのも。

仏の顔も三度までです。

今日の夜空も澄み渡っている。

俺の心とは裏腹だ。

キッドは、シルクハットを深めにかぶると、意を決したようにハングライダーを飛ばした。

今夜こそは、あの名探偵を夜のデートに誘ってやる。

いつもは、そっけないあの名探偵に愛の言葉を並べるよりも、ただ単にしつこいようなキスをすれば良いのだろうか……。

拒まれたらどうしようと俺の心の中では震えている。

名探偵の家に飛んで行くと、今夜は彼も月を見ていたようだ。

体重を感じさせない様に軽やかに降りると、俺は震える心を押さえながら、『やあ。名探偵、君も月を恋しいと思っていた様に私の事も恋しかったのですか?』

赤い顔をして、反対の方を見ている名探偵に、『いい加減、心を開きなさい。ほら、見てみろよこの星々を名探偵、君の為にだけに輝いているんだよ。』

名探偵は、ふうーと溜息をつくと『お前そんな事を言って、恥ずかしくないのか? 星が輝いているのは、俺のためじゃない。ただ太陽の光に反射して輝いているだけだ。寒気が立つ。』

ガックリと肩を落とすキッドを横目で見ながら、嬉しくもあった。涙眼になっているキッドの顔を両方の手で挟むと音が出る程、唇を重ねた。

『俺は、ロマンチストじゃねえんだ。悪い。キッド』

告白 その？

本文

この日の気温は、少しだけ肌寒く感じる程度だ。

どんな愛の言葉を並べても、決して靡かない あの人。

蒼い炎を思わせる様な瞳で、俺の心さえも捕まえてしまう。

今夜こそ、彼の心を頂く事にした。

今回も、名探偵の家に飛んで行くと、かの麗しい人は、ため息をつきながら夜空をみている。

気配を消して近づくと『なんだよ・・・キッド』直ぐにばれてしまいました。

それでも、ポーカーフェイスで『一緒に月見でも・・・と思いましたがね。』

多少 名探偵から警戒するような嫌な顔をされるが、じっと彼の目を見ている。

『な、なんだよ。(ー；)』

『これをあなたに渡したくて、この世のはてから持って来ました。』

新一は、全身に鳥肌が立ち捲りだった。

キッドは、真っ赤な薔薇の花束を新一に渡した。

『あなたの美しさは、薔薇さえも恥らわせる程だ。』

新一は、震えながら『キッド・・・お前は・・・俺を・・・』

キッドは、ただ新一だけを見つめていた。

『ええ。そうですよ。』

愛の告白を受け取って貰ったと思ったキッドは、心の中でガッツポーズをした。

名探偵は『・・・お前は・・・俺を・・・殺したいのか!』

『は?』

がくんと目の前で、倒れた名探偵に驚いた。

青い顔をしていた。

チアノーゼを起こしていた。

咳き込む名探偵を見て、オロオロしていたキッド。

『め、名探偵！？』

ゼイゼイと苦しそうに俺の顔を見ていた。

『まさか、薔薇アレルギーだったのか？ すまない。名探偵のイメージは薔薇だった、つい薔薇を持って来たんだ。』

必死になって何度も謝るキッドに、免じて許してやった。

『キッド。すまないが、この薔薇の花束は、お前が持って帰ってくれ。』

ヨロヨロと部屋の中へ入って行った名探偵。

キッドの愛の告白は、今夜も失敗に終わった。

肩を落とすキッドに、

『いいよ。薔薇の花が枯れるまで、お前がその花の世話をしろ。いいな。』

甘いつたる薔薇の香りが家中に広がっても、必死に発作を押さえようとする名探偵に、抱きつくキッド。

『大好きだよ。』

薔薇の花束は、花瓶に入れられ、空気清浄機の側に置かれた。

此処だったら、新一の発作も起こらないだろう。

発作が収まった新一は、『快斗。何で俺のイメージが薔薇なんだ？』

『だって、名探偵は、華奢で綺麗だし、でも刺があって迂闊に近寄ると、こっちが怪我をする。だって、サドでしょ。』

いきなり新一に首根っこを掴まれ、『魚でも食わせてやろうか。』座った目で睨んで来た。

『ゴメンナサイ・・・デス』

その夜は、薔薇よりも甘い一夜をすごした2人。

告白 その？（後書き）

これも実話です。

薔薇だけは、ダメです。

待ち合わせ その2（前編）

この日、新一は朝から機嫌が悪かった。

朝起きたら、偏頭痛がして来た。その上、いつものお気に入りのコーヒーは、豆が切れていた。しかも、フィルターさえもない。ついてない……

そんな一言が口からポロリと出て来る。

シャツを羽織って眉間に皺を寄せながら、車の鍵を探している。だが、昨日此処に置いておいたはずの鍵が無い。しかも、財布もない。

盗られたのか？！

そう思いながらも、軽く舌打ちをして車の鍵と財布を捜し始める新一。洗面所やキッチンのカウンターの上、ダイニングテーブルの上、リビングのテレビの前を探してみるが、何処にも財布と車の鍵が無い。

苛つく自分の気持ち。そしていつもの偏頭痛が俺を襲って来る。前髪を掻きむしりながら、「クソッ！」と呟くと新一は、もう一度ベッドの周りを探し始めた。ベッドの脇に置いてあるライトスタンドテーブルの上も、一番先に探したが、財布も車の鍵も出て来なかった。ここに居ない快斗へと疑いの気持ちを持って行ったが、快斗が自分の車を使う事は先ずない。快斗自身、車は持っているし、それに今は別居中。ちょっとした事で2人はケンカをしてしまい、快斗は実家に帰っているのだった。

だから、快斗が俺の財布や車の鍵を隠す必要など無いのだと言う事だ。

溜息をつきながらも探し物をしていると、ベッドとライトスタンドテーブルの間にキラリと光る物が見えた。それは、何と車の鍵だった。そして、財布も落ちていた。

心の中で、快斗なんじゃないのかと疑った事を少し謝りながら、新一は早速コーヒーを買いに出かけた。いつもなら、家の台所事情は、快斗が把握している。コーヒーも何もかも快斗に任せていたから、一体いつもの美味しいコーヒーの豆は、何処で買って来たのかさえ、新一には分からないのだ。

とりあえず、近くの喫茶店でコーヒーを飲む事にした新一は、喫茶店のマスターから「あれ？快斗くん？もしかして、コーヒー豆がそろそろ切れたんじゃないの？いつもなら、取ってあるよ。」そう言うて来て、新一にコーヒー豆を引いたのをくれた。

快斗がいつも俺に買って来てくれていたのは、ここのコーヒーだったんだ……。

いつものホロ苦いコーヒーを口に含むと、ようやく新一の偏頭痛が少しずつ小さくなって来た。

「あ、あのー工藤ですが……。快斗は、いつも此処でコーヒー豆を分けてもらっているんですか？」

それとなしに聞いてみると、マスターは少し驚いた顔をしていたが、俺の方を見てニツコリ微笑むと「やっぱり快斗君に似てるんだね。本人が、自分と工藤新一は、似てるんだ。何て言っていたからね。コーヒーお代わりどう？」

「はあ。ありがとうございます。」

コポコポと注がれるコーヒーは、新一の鼻をくすぐる。俺がゆっくり味わいながらコーヒーを口に含むとマスターは、毎月コーヒーが切れかける頃に成ると、必ず快斗が此処にやって来て、新一の為にコーヒー豆を買いに来ると話してくれた。そろそろ現れる頃だと思っていたけど、まさかそのコーヒーを毎朝飲んでいる新一がやって来るとは思いもしなかったと話してくれた。

「はあ。」

「工藤君。もしかして、快斗君とケンカでもしたの？」

思わず口の中に入っていたコーヒーを吹いてしまった俺。

マスターの前掛けに茶色いシミが着いてしまった。

申し訳なくマスターの顔を見ると、俺よりももっと申し訳なさそうな顔をして俺を見ていた。

「すまないね。変な事を言ってしまった。」

「良いんですよ。ケンカしたのは、本当ですから、ここ二週間アイツには会っていませんし。」

「そうだったのかい。」

新一は、またゆっくりとほろ苦いコーヒーを飲み始めた。

あれは、全て俺の所為だ。思わずやってしまった自分の過去の失態に眉を顰めると、手の中のコーヒーカップに目をやると、黒く店内の照明の光をゆらゆらと揺らしながら反射させる。

それは、まるで快斗の濡れた瞳のようだった。

「はあー」

いつの間にか、何度目かの溜息を付いていたらしく、マスターからずっと差し出された一枚のコースター。其処には、快斗のバイト先の店の名前と電話番号が、書いてあった。

「ミュラージュ」

「何があつたか知らないけど、偶には工藤君から折れるのもいいかもね。」

マスターの言葉に驚いていた新一は、マスターの顔を見ると快斗が置いて行つた指輪を自分の指に嵌めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3251v/>

お仕置きプレー

2011年8月10日10時50分発行